

## 全国学力テストに参加しないように ～県内のすべての市町村教委・小中学校長へ要請～

文科省は、来年度以降の全国学力テストを、今年度以上に改悪しようとしています。

① 来年度は、国語・算数（数学）に加えて、理科が実施されるため、子どもたちの負担が増大します。また、学校・学級ごとの S-P 表（成績順に一覧にした表）が提供されるため、学級内まで競争が持ちこまれます。

② 再来年度は、すべての中学校で英語調査（「読むこと」「書くこと」「聞くこと」「話すこと」）が行われます。中でも、「話すこと」は個別に実施するため、授業時間が数時間費やされます。学校教育に支障を来すことになるのではないかと懸念されます。

愛教労は、県内のすべての市町村教委と小中学校長へ、要請書を送りました。全国学力テストに参加しないように訴える内容です。



### 全国学力・学習状況調査に関する要請書

日頃は、市町村の教育行政にご尽力いただき、ありがとうございます。  
子どもたちはだれもが、「分かりやすく楽しい授業を受けたい」「勉強が好きになりたい」と思っています。ところが、全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）は、3 時間あるいは 4 時間とテストが続きます。日頃これだけ続けてテストを行うことはありませんので、子どもたちは疲れ果てます。また、授業で学習したことのない難しい問題が多数出てきますので、子どもたちは自信をなくしたり、学習意欲を低下させたりします。

（中略）

文部科学省は、「4 月前後になると、例えば、調査実施前に授業時間を使って集中的に過去の調査問題を練習させ、本来実施すべき学習が十分に実施できないなどといった声の一部から寄せられているといった状況が生じています。」（通知 平成 28 年 4 月 28 日）として、全国学力テストが学校教育に重大な弊害を与えている実態を認めました。都道府県別の成績を公表しているだけでも、「序列化や過度な競争が生じないようにする」（実施要領）に反する事態になっているにもかかわらず、今年度から都道府県に加えて政令指定都市の結果を公表しました。

（中略）

全国学力テストは、競争をあまり、教育をゆがめ、子どもの心を傷つけるものです。そこで、以下の要請をします。

記

- 1 全国学力テストに参加しないこと。
- 2 たとえ参加しても、市町村および学校別の成績を公表しないこと。  
また、事前のテスト対策をしないよう指導すること。

### 愛教労障害児教育部

## 第 17 回全国障害児学級・学校学習交流集会 in 奈良に参加 2018.1.6 ~ 8

1 月 6 日～ 8 日に奈良市内で開催された全国集会に、愛教労からは 3 名が参加しました。全国からは約 900 名が集まりました。

### オープニング集会は

現地企画の組合活動についての寸劇と替え歌歌謡ショーでにぎやかに幕を開けました。

### 記念講演は

クレスコの連載でもおなじみの丸山啓史さん（奈良教育大学）が、「こどもの気持ちの育ちと発達保障」というタイトルでお話しされました。

一見「問題」に見える子どもの行動を教師は無くさせようと努力するが、「問題」が減少することが、必ずしも子どもの育ちだとは限らないという話が心に残りました。「問題」の中にも「発達」が見えるというのです。子どもたちのエピソードから読み取ることのできる「発達」の意味を分かりやすく解説してくださり、子どもからはじまる教育の大切さを改めて考え直させてください

ました。

### 夕食交流会では

恒例のブロック毎の紹介がありました。東海ブロックは「大きなカブ」ならぬ「大きな核」の寸劇をしました。I CAN やみんなの力で最後には核が抜けるという内容で好評でした。

### 14の講座と6つの文化バザール(7日午前)

奈良市の福祉型専攻科「ジョイアススクールつなぎ」の職員による講座に出ました。

この学校は特別支援学校高等部卒業後の大学のような場所を作りたいと始められた学校で、障害者総合支援法を使い、最初の 2 年は自立訓練事業を行い、次の 1～2 年で就労移行支援を行います。2 年間の自立訓練事業では様々な授業や体験、そして遊びでとにかく青春を謳歌します。

授業に出るのもよし、サボるのも自分の決断としてよし、スタッフは仕掛けを作ってほぼ見守るというスタン

スで、自分たちで解決する力を育てるという実践がとても自由で新鮮に感じました。そこで遊び尽くすと次の1年で学生は大きく変わり、就労に向けて意欲的になるそうです。自分に自信が持てたり、余暇の過ごし方が充実したりすることが働く意欲につながり、ひいては離職率の低下にもつながることがわかりました。

#### 基礎講座と17の分科会(7日午前)

発達障害児の教育実践(小中)に出ました。東京の立川先生の実践は、魅力ある授業を展開しつつ学級集団作

りをし、とことん子どもに寄り添うことでした。暴れん坊だった児童が落ち着いていくレポートで、先生の熱意に圧倒されました。この分科会で教えてもらった詩の授業に早速取りくみ、子どもたちと一緒に楽しんでいます。

今回の講演や講座からたくさんのことを学びました。また、たくさんの方の青年教職員の参加があり、全国の先生方から元気をもらうとても充実した学習交流集会となりました。(障害児教育部長 中島)

#### 愛教労青年部

### 「全国青年教職員学習交流会」 = TANE! in 福島 2018. 2. 3 ~ 4

TANE とは全国の青年教職員によって企画運営が行われる青年の青年による青年のための学習と交流の全国大会です。

愛教労青年部は7名が参加しました。今年は福島での開催でした。

東日本大震災から今に至る福島の歩みやそこでの教育課題、作文教育を中心とした講演を聞きました。

#### 分科会では

発達支援の分科会に参加。校種を問わず、読み書きにつまずきのある児童にどのような支援を行えば良いか、発表を聞くとともに、グループ討議を行いました。特別支援学校・特別支援学級と通常学級との関係や、それぞれの教師としての関わり方には考えさせられました。

#### 夕食交流会では

福島県や全国の方と歓談。今回は温泉地・飯坂温泉での開催ですから雪見の温泉も堪能しました。

#### 翌日は

教職員の働き方についての分科会に参加しました。愛教労では普段から熱心に取り組んでいる分野です。部活動については教職員の中でも様々な意見がありますが、現状では部活動に限らず、仕事が多すぎるため効率化ではどうにもならないとの話がでました。小学校の部活については、法律上おかしいとの話もありました。

全教では授業持ち時間数を小学校 20 時間、中学校 18 時間、高校 15 時間以下にすることを要求しており、それくらいになれば働きやすい職場になりますが、実現には長い道のりになりそうです。(文科省は、国会で授業 1 時間につき、準備整理で 1 時間必要と答弁しています。)

#### 集会終了後は

レンタカーを借りて、愛教労青年部企画の、被災地見学へ行きました。場所は、昨年より避難指示が解除され、法的には居住可能となった浪江町です。浪江駅前にはゴーストタウン化していました。とはいえ、鉄道やバスは本数が少ないながらも動いていました。それ以外は、コンビニなど限られた店しか営業しておらず、歩いている人はほとんど見られませんでした。多くは車で通過するのみ。除染され、放射線量が下がったとはいえ、この地域で店が営業できるほど人が戻っていないので、現実的には住むのは困難だからです。駅周辺にあった店も、病院も、学校も、震災から時間が止まった様子でした。自販機ですら、再開した浪江駅以外は震災後は使われず変色していました。



次に、津波で流された地域にある浪江町立請戸小学校へ。現在は校舎のみが津波の恐ろしさを静かに語っています。まわりには、除染時に取り除かれた汚染土がうず高く積みまっています。この世の現実でしょうか。

仙台市の閑上地区に寄って空港へ。閑上地区は仙台中心地からさほど離れていないだけに津波で流され何も無い様子が際立っていました。

福島で行われた TANE! を通して、福島の今、教育の今を多く学んだ2日間でした。(青年部 堀口)

### 全教主催「生活権利集会」に参加

2018.1.20 ~ 21

今年の集会で一番の話題は教職員の多忙化問題でした。各都道府県から様々な取り組みが紹介され、交流を深めました。

愛教労からは、1月26日に行われた愛知県教委との「教員の多忙化解消プラン」の意見交流会に対しての当局の意見書を持参して、概要の説明をおこないました。全国から注目されている一つは、部活動顧問に関わる教職員労働問題です。全国的に小学校で部活動を実施している自治体は少なく、「学習指導要領にもない小学校の部活動が存在するの？」との声も上がっていました。

来年度からの小学校現場は、「特別の教科道徳」「英語」など教育課程の変革により、忙しい状況が増すことは必至です。

そんな中、部活動顧問として指導に従事すれば、多忙化に拍車をかけ、社会全体で解決の方向を模索している「教職員の多忙化の解消」に逆行することになります。

小学校の英語科の導入は、多忙化に拍車をかけるだけではなく、ベテラン教員が英語指導をおこなう自信がないから、高学年の担任を引き受けられないという声があがる事態にも発展し、校内人事のバランスの問題までおきているようです。

2020年度から、臨時的任用教員が「年度内会計任用職員」となることで、非正規職員への待遇が悪化することが予想されています。私たちが勤労と生活や権利について深く考えることが大切であると思える集会でした。(臨対部長 天崎)

